２０２２年 2月 15日
第136号

JR東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本
発行人 助川一実
編 集 情宣担当
ホームページ
http://www.jreu-yokohama1.jp/

イーハトーブ

2月15日号

原田マハさんは、私の好きな作家の一人だ。美術館の展示企画などを行うキュレーターの経歴を持つ原田さんは、アートを題材にした小説を多く上梓している。ことをご存知の方もいるだろう。その中の一つに「生きるぼくら」がある。ひきこもりとなった24歳の青年がひょんなことから祖母のいる蓼科へ向かい、自然とのふれあいや人との出会いで大きく人生が変わっていくという物語である。

私事であるが1月末に異動と言われた。異動先は自らのキャリアプランとかけ離れた職種で具体的な説明はなく納得感ゼロだった。

異動を言われてからの1週間がすごかった。私への心配や激励の意を込めて、毎日、職場で、出先で、さまざまな場面でいろいろな人が声をかけてくれ、連絡をくれ、会いに来てくれ、何度もご飯をごちそうになり、食べきれないほどの差し入れをいただいた。

「これが東労組なんだ」と思った。利害関係や損得ではなく、仲間のために動ける、自分の時間やお金を使える。メリットやデメリットの価値判断ではないのだ。

原田さんの小説は、アート作品と物語の融合も魅力の一つだが、それと共に主人公が出会う人々とのふれあいも魅力だ。冒頭で紹介した「生きるぼくら」ではひきこもりだった何も持たない青年に温かく手を差し伸べる人が多く登場する。そこに描かれている人間関係は、利害関係ではない。その関係が多くの読者を惹きつけ、憧れ求めているものではないか。

この物語で教えられたことは、人生を豊かにするものは金銭や地位、名誉ではなく、仲間の存在だということだ。人間は一人では生きていけない。この物語に教えられたことを異動の際に私は実感したのだ。

お金に目がくらんだり、我が身可愛さも一種の人間らしさかもしれない。でもそんなことに囚われて右往左往し仲間を切り捨てて何が残るのだ。生きるぼくら。“ぼく”ではなく“ぼくら”なのだ。風当たりの強い今こそ東労組という真の仲間と共に進んでいこう。仲間と共に歩んだ道は、輝かしい人生として自らの中に残るはずだ。（M・W）

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちも外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。